

一味違う代議士誕生

座右の銘は西郷隆盛

先の衆議院議員選挙で東京21区から立候補、当選し代議士となった民主党・長島昭久氏。昨年の



十一月十九日に召集された特別国会から国会議員としての一歩を踏み出した。国政の場での活動に

21区有権者は、大きな期待を寄せる。

二月二十日、同二十六日、三月三日と立て続けに行った国会議員等について話を聞くという議員会館を訪ねた。質問のための準備で「連日の徹夜続き、今も針治療をしてもらっていたところですが、でも苦になりません」、

長島代議士は、開口一番こう言った。疲労の跡は目の周囲に残る。

国会の印象を聞くと、「来るべき所に来たとい

うもので違和感はなかった。むしろ毎日が充実して

いて楽しんでいます」

あたかも水を得た魚のごとく、国会という海で躍動しているのが伝わっ

てくる。

議場での論戦に接して感じたことを聞くと、「委員会などはまた別な

ことでしょが、本会議でのヤジには自分の身内に

対しても首を傾げたくないのでない。国会は、より

良い結論を導き出すための、国民を代表しての議論の場ですから、自分の

正当性を誇示するためだけの発言や、揚げ足取り

「赤絨毯を踏むと人間が変わると言われる国会議員だが、真摯で、国民の

スタンスに立った姿勢を長島氏は堅持している。

取材日は、身内である民主党の一議員が秘書給与流用疑惑で議員辞職を

議長宛に提出した日だった。この問題にも長島代

議士は、「かつて21区選出の民主党議員が同じよ

うな問題で議員辞職しましたが、問題の議員は、

その後から流用を続けていたわけで、論外です」と二刀両断した。

二十日、二十六日の国会での質問は、民主党の安全保障部を代表しての

もので、台湾総統選挙、公民投票への日本の申し

入れに対するもの。安全保障のエキスパート・長島代議士の面目躍如とい

った内容だった。三日にはイラクに派遣されている自衛隊の諜想防衛問題

で政府を鋭く追求した。「命もいらず、名もい

らず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。この仕末に困る人なら

は、艱難をともにして国家の大業は成し得られぬなり」との西郷南州の遺訓を座右の銘とする長島

昭久氏、民主党という党派に所属はするが、これまで

の代議士とセンセイとは一味違った、党派の枠を越える力を持った、確かな政治家ではなからう

長島昭久衆院議員インタビュー